

看護学におけるフェミニスト・アプローチに関する 文献研究

著者	朝倉 京子
雑誌名	学長特別研究費研究報告書
巻	14
ページ	53-54
発行年	2003-06
その他のタイトル	Literature Review of Feminist Approach in Nursing Science
URL	http://hdl.handle.net/10631/493

新潟県立看護大学学長特別研究費 平成 14 年度 研究報告

看護学におけるフェミニスト・アプローチに関する文献研究

研究者 朝倉 京子
新潟県立看護大学 (基礎看護学)

Literature Review of Feminist Approach in Nursing Science
Kyoko Asakura
Niigata College of Nursing

キーワード：フェミニスト(feminist),フェミニズム(feminism),ジェンダー(gender),
社会構築主義(social constructionism),看護学(nursing science)

目的

本研究の目的は、看護学におけるフェミニスト・アプローチに関する文献検討を行い、その特徴と課題を明らかにすることである。

研究方法

フェミニスト・アプローチに関する国内外の看護学の文献を収集するために、医学中央雑誌とCINAHLを用いて文献の検索を行った。検索に用いたキーワードは、ジェンダー (gender), フェミニズム (feminism), フェミニスト (feminist), 社会構築主義 (social constructionism) である。検索した文献のなかから、ジェンダー・パースペクティブ*1を採用している、あるいは、フェミニスト・アプローチを用いている文献を選択し、その内容の検討を行った。

研究結果および考察

文献の検索結果から、今回の研究の対象として選択した文献は55の英文献であった。和文献には、フェミニスト・アプローチを用いた文献はなく、ジェンダーという用語を用いている場合も、その用語はジェンダーに関わる理論的パースペクティブとは無関係であり、今回の研究の対象として採用されなかった。以下では、本研究で行った文献検討の結果を一部紹介する。

フェミニスト・アプローチあるいはジェンダー・パースペクティブを用いた文献を大別すると、①研究の主要な対象は女性の経験であり、その目標は女性という集団にとって有利な位置から世界を明らかにすることである、とする立場。その研究方法論は、文脈的な志向性、主観性の強調、(人間対人間の) 関係性の重視を特徴とする¹⁾ etc、②女性的なケアの倫理に基づき、看護師と患者という一対一の相互関係のダイナミクスを重視し、そのなかに看護の本質を見いだそうとする立場^{2) 3)} etc、③マルクス主義から派生したクリティカル・セオリーに基づき、知識や意味を文化的歴史的な構造のなかで作られたものと考え、個人的で私的な意味よりも社会構造的な意味を重視して、そのなかで権力や階級による不平等な構造を明らかにしようとする立場^{4) 5)} etc の3種類となる。

①はフェミニスト科学*2の流れにあり、②は、「ケアの倫理」を提唱した Giligan⁶⁾の研究に始まる倫理学の流れを汲んだ立場であるが、両者とも「女性的」な特質を重要視し、それを中心的な主張にしている点で類似している。さらに、①と②が個々人の主観的な体験やその体験の文脈的意味を非常に大切にすることに対し、③のクリティカル・セオリーに基づく立場は、文脈的ではあるものの、より社会構造的でマクロな視点からの探究を行い、例えば女性の階級的な差別や、ケア/ケアリングに関する潜在的で差別的な性質を、研究的な課題として提示している⁴⁾ etc。

以上、看護学におけるフェミニスト・アプローチあるいはジェンダーに関わる理論的パースペクティブを採用した論文をごく簡単に概観してきたが、果たしてこれらの文献の目的は、看護学に新しいパラダイムやアプローチを持ち込み、フェミニスト科学としての新しい看護学を創造することなのだろうか。

Schiebinger⁸⁾がいみじくも言うように、フェミニスト科学という言葉が、女性やフェミニストのための特別な科学を意味するならば、我々の目標はフェミニスト科学を創造することではない。看護科学を含め、すべての科学は人間の営為であり、女性やフェミニストも含めたすべての人間に貢

献するものでなければならぬと考えられる。

一方、看護学以外の学問領域では、方法論的な議論は内容的な議論の後に行われてきた。反対に、看護学においては、その学問が扱う内容についての議論よりも前に、研究方法論や知識の構造についての議論（例えば、看護理論は存在するか否か、看護理論は実証主義の方法論的目標を発展させるべきか、それとも現象学的方法論的目標を発展させるべきなのか、量的研究方法論を採用するのかそれとも質的研究方法論を採用するのか、フェミニスト・アプローチを採用するのか伝統的なアプローチを採用するのか、等）が行われてきたことが指摘されている⁹⁾。そしてこれは大変ユニークな学問の発展の経緯といえる。このように、特徴的な発展過程を経た看護学において、新しいアプローチの有用性を問う場合には、それが、看護学の追究すべき内容や、看護学のパラダイムに合致するのかを十分に問わなければならない。また、そのアプローチを採用することの学術的な結果を慎重に吟味する必要がある、代替的なアプローチとして安易に飛びつくべきではないと考える。

しかしながら、社会や医療現場、家庭における女性の補助的役割の延長として看護が発展し、ある程度の専門職的な立場を獲得した現代においても、看護実践や看護学研究を担う人間の多くは依然として女性である。このような領域だからこそ、ジェンダーに関わる理論的なパースペクティブを採用すること、あるいは、ケア/ケアリングを女性の性質に特有なものとして位置づけるのではなく人類に普遍な行為と考えた上で看護学を構築することが必要ではないか。従って、看護学の領域におけるジェンダー・パースペクティブの意義、様々なフェミニスト・アプローチの有用性や意義がさらに批判的に探究されるべきである。これらについては今後の課題とする。

引用文献

- 1) Parker B & McFarlene J. Feminist theory and nursing. *Advances in Nursing Science* 1991; 13(3): 59-67.
- 2) Bradshaw A. Yes! There is an ethics of care. *Journal of Medical Ethics* 1996; 22: 8-12.
- 3) Benner P & Wrubel J. *The primacy of caring*. Melto Park CA: Addison-Wesley; 1989. (難波卓志訳. 現象学的人間論と看護. 東京: 医学書院; 1999)
- 4) Allen D. Allman M K. & Powers P. Feminist nursing research without gender. 1991; 13(3): 49-58.
- 5) Berman H. Ford-Gilboe M & Cambell J. Combining stories and numbers: A methodological approach for a critical nursing science. *Advances in Nursing Science* 1998; 21(1): 1-15.
- 6) Giligan C. *In a different voice*. Massachusetts: Herved University Press; 1982. (生田久美子・並木美智子訳. もう一つの声. 東京: 川島書店; 1986)
- 7) 江原由美子. ジェンダーと社会理論. *ジェンダーの社会学*. 東京: 岩波書店; 1995, p. 29-60.
- 8) Schiebinger L. *Has feminism changed science?*. Massachusetts: Herved University Press; 1999. (小川眞里子・東川佐枝美・外山浩明訳. ジェンダーは科学を変える?. 東京: 工作舎; 2002.)
- 9) Meleis A I. *ReVisions in knowledge development: a passion for substance*. *Scholarly Inquiry for Nursing Practice: An International Journal* 1998; 12(1): 65-82.

*1 ジェンダーとは一般的に、「生物学的性別」と区別される「社会的・文化的・心理学的」性別を意味する概念であるが、ジェンダー・パースペクティブとは、ジェンダー概念を取り巻く新たな理論的パースペクティブのことである。例えば、最近では、ジェンダーを「性別」ではなく「性的秩序」として位置づけ、「ジェンダーと権力」の関わり合いにおいて男女間の（不平等な）社会関係に関わる社会構造の形成や変動を考察する理論的パースペクティブがある⁷⁾。

*2 フェミニストはしばしば科学に特別な目標を設定し、それを「フェミニスト科学」と規定してきた。しかし理想として掲げるスタンスは様々である。ここでは特に、「女性不在の科学」から女性が「科学に普通に」参加するリベラルなアプローチへ、そして「女性の視点から」物事を見る差異のフェミニスト・アプローチへと発展した過程でのフェミニスト科学⁸⁾を指す。